

日本企業における TOKKYO.AI・Summaria・Genzo AI の導入承認資料レビュー報告

エグゼクティブサマリー

本調査の結論を先に述べると、現時点で最も社内承認に載せやすいのは Summaria、知財検索とドラフティングの一体運用で有力なのは TOKKYO.AI、最も将来性は高いが、公開資料ベースでは稟議前提資料の不足が大きいのが Genzo AI です。Summaria は、ベンダーが ISMS 認証 (ISO/IEC 27001) を取得済みで、AWS 保存、外部AI送信先、SSO 対応、再学習不使用の考え方などが比較的明示されています。TOKKYO.AI は専用環境、監査ログ、検索履歴の専用環境内保持といった強みがありますが、公開資料上は ISO/SOC、保存リージョン、暗号化詳細、SLA の明示が弱く、さらに利用規約で Azure OpenAI Service または OpenAI API への送信が明記されており、契約上の整理が重要です。Genzo AI は国内 AWS 保存、運営者アクセス不可、ユーザー主導の完全削除、OpenAI API と Gemini API の二次利用禁止など、設計方針は非常に強い一方で、2026 年春時点では公開されている法務・契約・認証資料が限定的で、**本番導入より PoC/限定導入の承認向き**です。 ¹

日本企業の承認資料としては、単に「便利そう」「特許業務が速くなる」では足りません。最低限、サービス説明資料、データフロー図、保存・暗号化・ログ・再学習利用の扱い、外国第三者提供の整理、削除・解約時のデータ処理、管理者権限設計、SLA・インシデント通知、価格表、契約ドラフトを一式そろえる必要があります。個人情報保護委員会は生成AI利用時の注意を公表しており、さらに外国にある第三者への提供ガイドラインも整備されています。加えて、経済産業省はAI事業者ガイドラインで、リスク管理、透明性、ログ・監査可能性、適切な人間関与を重視しています。したがって、稟議の通しやすさは「機能の良し悪し」よりも、**説明可能性と監査可能性の良し悪し**で決まります。 ²

承認審査の論点

社内承認資料の作成では、対象ツールの評価軸を最初に固定しておくことが重要です。生成AI・知財ツールの導入判断では、少なくとも **業務適合性、データ区分、外部送信の有無、保存場所、再学習への利用可否、権限統制、ログ・監査、契約上の責任分界、終了時のデータ処理、費用対効果** を分けて確認すべきです。これは、個人情報保護法の目的外利用・安全管理・第三者提供・外国移転の論点だけでなく、生成AI特有の誤情報、説明不能性、モデル汚染、機密情報のプロンプト送信といったリスクを、従来のSaaS審査と同時に扱う必要があるためです。 ³

承認資料に添付すべき「最低限の証跡」は、次の並びで集めると実務上扱いやすいです。第一に、**製品概要とユースケースの一枚紙**。第二に、**公開資料ベースのデータフロー図**。第三に、**利用規約・プライバシーポリシー・セキュリティポリシー・DPAの有無一覧**。第四に、**ログ保持・削除・バックアップ・SLA・インシデント時通知の条件表**。第五に、**料金表と利用量連動要素**。この順で並べると、情報システム部門、法務、知財部門、個人情報保護責任者、購買の視点を一枚の稟議資料に統合しやすくなります。 ⁴

TOKKYO.AI の評価

サービス概要とベンダー

TOKKYO.AI の実体として公開されている主力導入サービスは、「プライベートAI特許」「MyTokkyo.Ai」として案内されている知財検索・生成AIサービスです。運営主体はリーガルテック株式会社 ⁵ で、公式の会

社概要では知財ポータル運営、知財生成AI・AI検索・分析ツール、IPマーケットプレイスなどを事業に含めています。製品ページでは、AIチャット検索「ChatTokkyo」、生成AI Plus、AI類似特許検索、分析機能、企業情報収録、日米欧中韓PCTデータ収録などを打ち出しています。価格は初期費用0円、1ID月額20,000円で、複数IDではボリュームディスカウントの可能性がります。 6

技術的仕組み

公開資料から見る限り、TOKKYO.AIは**オンプレミスではなく、専用環境つきクラウド型SaaS**として理解するのが妥当です。サービスはブラウザ利用を前提としており、主要ブラウザで動作、Chrome推奨と明記されています。モデルについては、価格ページFAQで「機能ごとに複数の生成AIを使用しており、GPT-4o (OpenAI)、Gemma (Google)等」とされ、利用規約ではプロンプト情報を Azure OpenAI Service または OpenAI API に提供できると定めています。したがって、少なくとも公開情報ベースでは、**Azure OpenAI系とOpenAI直結API、さらにGoogle系モデルを機能別に併用する構成**です。顧客向けAPI/SDKは公式公開資料では未指定です。 7

推論フローは、概ね **ユーザー入力 → 生成AI Plus または ChatTokkyo → 特許DB/企業情報DB・類似特許検索 → 結果表示/分析/ダウンロード** という形です。AI検索では、AIが入力内容を分析して類似度順に300件を表示し、関連度の高いキーワード抽出、重み付け、年代絞り込み、関連特許の出願動向可視化が可能とされています。生成AI Plusで得た「背景技術」「課題」「手段」などの出力から、ボタン一つでAI検索に連携できる点も明示されています。これは、**ドラフティングと先行技術探索を一連の画面遷移で回す知財ワークフロー型**の設計です。 8

データ保存とログの扱いは、サービスは「ユーザー専用環境」で提供され、検索履歴などのデータは専用環境外に出さず、二次利用しないとFAQで説明しています。またAI検索ページでは、**監査ログが残り、いつ誰がアクセスしたかを明確に保存できること**、検索式や検索履歴を社内で安全に共有できることが書かれています。一方で、利用規約は、プロンプト情報の一部または全部を Azure OpenAI Service または OpenAI API に提供できると規定しており、2025年4月1日時点ではそれらの送信情報は Microsoft または OpenAI のサービス開発・改善に使われず、他ユーザーと共有されないとしつつも、**将来にわたっては保証しない**としています。ここは承認上の重要な読みどころです。 9

暗号化については、TOKKYO.AI自身の公開資料には**保存時暗号化方式、転送時暗号化方式、鍵管理方式、保存リージョン**の明示が見当たりません。そのため、ツール固有の暗号化説明は「未指定」と評価すべきです。他方で、上流の Azure OpenAI 側は、保存データの暗号化、リージョン同居、データの学習不使用、可用性SLAを公式に示しています。しかし、**TOKKYO.AIがどのリージョンに Azure OpenAI を展開しているか、OpenAI直結APIをどの範囲で使うか**は公開資料だけでは判断できません。 10

公開情報から再構成した概念データフローは次のとおりです。 11

flowchart LR

```
U[利用者ブラウザ] --> A[TOKKYO.AI 専用環境]
A --> G[生成AI Plus]
A --> C[ChatTokkyo / AI検索]
G --> LLM[Azure OpenAI Service / OpenAI API / Google系モデル]
C --> PDB[特許・企業情報DB]
G --> C
A --> H[検索履歴・履歴管理フォルダ]
A --> LOG[監査ログ]
A --> OUT[テキスト / HTML 出力]
```

この図は、専用環境、生成AI Plus、ChatTokkyo、類似特許検索、履歴管理、監査ログ、外部 LLM 送信条件に関する公開説明をもとにした概念図であり、内部サブコンポーネント、リージョン、暗号鍵管理の詳細は公開資料では未指定です。 9

主要なインテグレーションパターン

TOKKYO.AI で公開されているインテグレーションパターンは、**ブラウザSaaS利用、生成AI結果からのAI検索連携、テキスト/HTML ダウンロード、検索履歴と監査ログの共有**が中心です。つまり、公式資料ベースで確認できるのは、**知財担当者・研究開発担当者が同一専用環境で使う協働型のSaaSパターン**です。社内 DB 直接連携、SSO、SCIM、顧客向け API、リバースプロキシ必須化などは、公開資料では未指定です。したがって、社内承認資料では「標準導入パターン」と「別途確認が必要な統合項目」を分けて書くべきです。 12

セキュリティ・コンプライアンス評価

TOKKYO.AI の強みは、**専用環境、検索クエリの社外持ち出し抑制、監査ログ、二次利用しないとの表明**にあります。特に知財業務では、プロンプト自体が研究テーマや事業戦略を表しうるため、「検索クエリを社外に出さない」という設計思想は承認上の説明力があります。一方で、利用規約で Azure OpenAI Service または OpenAI API への送信を認めているため、「社外に出さない」の意味は、**少なくともアプリケーション層の検索履歴保持**についての話であり、**上流AI推論先を完全に閉じるものではない**と整理するのが厳密です。 13

認証・規格面では、ベンダー公開資料としてはプライバシーポリシーと情報セキュリティポリシーは確認できますが、**TOKKYO.AI 固有またはベンダー全社としての ISO/IEC 27001、SOC 2、ISO/IEC 27701、SLA 数値**は、調査対象の公式公開資料からは確認できませんでした。よって、社内の情報セキュリティ審査では「**認証未確認**」ではなく、正確には「**公開資料ベースでは未指定**」と書くべきです。ここを曖昧にすると、稟議で後から差し戻されやすくなります。 14

国内法・個人情報保護の観点では、TOKKYO.AI に個人情報や共同研究先の機密が入力される可能性がある以上、個人情報保護法、PPC の生成AI利用注意喚起、外国第三者提供ガイドラインの確認が必要です。特に利用規約が Microsoft/OpenAI への送信を明示しているため、**外国第三者提供に当たるのか、委託なのか、どの国・地域で処理されるのか、再委託・サブプロセッサは何か**を契約で明確にする必要があります。欧州個人データが混在する場合は GDPR の処理者契約、移転条項、保存地域も追加確認が必要です。 15

リスクと緩和策、導入時の運用要件

最大のリスクは、**機密プロンプトの外部 LLM 送信と、それに関する公開資料の粒度不足**です。これに対する緩和策は、契約で **Azure OpenAI のみ利用、OpenAI 直 API の不使用、国内または指定リージョン固定、再学習禁止、下請・再委託一覧、インシデント通知時間、削除証明、監査協力** を盛り込むことです。次に、**誤情報・不完全性**のリスクがあります。利用規約自体が生成結果・検索結果の完全性、有用性、目的適合性を保証しないとし、特許取得可能性も保証しないと明示しています。したがって、**人間の弁理士・知財担当者レビューをワークフロー必須にする運用設計**が必要です。さらに、ベンダーはバックアップについて顧客責任を置いているため、エクスポート定期実施と社内保全が必須です。サービス廃止時には 2 か月前通知とされているため、終了時のエクスポート、削除、移行支援の条項も追加交渉が望まれます。 16

承認資料に書くべき運用要件は、**機密区分別の入力ルール、管理者権限の限定、監査ログの保全期間、定期エクスポート、バックアップ責任分界、ベンダー問い合わせ窓口、PoC 期間中の入力データ制限**です。価格見積りの要素は、ID 数、PoC 期間、本番利用部門数、ボリュームディスカウント有無、外部弁理士費との比較削減額の算定で構成すると説明しやすいです。契約条項では、**再学習禁止、再委託制限、リージョン明示、終了時データ返還、削除証明、監査・質問票回答義務、SLA/障害報告、賠償上限の再交渉**が重要です。 17

Summaria の評価

サービス概要とベンダー

Summaria は、特許文書の読解支援AIアシスタントとして提供されているSaaSで、運営主体は **パテント・インテグレーション株式会社** ¹⁸ です。会社概要ページでは、所在地、代表者、納入実績に加え、**ISMS 認証 (ISO27001) 取得**が明示されています。料金面では、公開パンフレットでフリー、ミニマム、ビジネス、コーポレートの各プランが示され、年額契約・月額契約の双方があり、加えて指示追加購入の料金テーブルも掲載されています。Summaria の主機能は、AIアシスタント機能、特許文書のサマリ作成、読解サポート、対比支援、分類支援、拒絶対応支援などです。 ¹⁹

技術的仕組み

公開資料から見る Summaria は、**クラウド型SaaS**です。公開パンフレットの「SYSTEM」欄では、**Azure OpenAI、SSL による暗号化通信、AWS** が並列で明記されています。さらにセキュリティ FAQ では、入力情報は AWS 上のベンダー管理データベースに機密性を保った状態で保存されると説明されています。したがって、基盤は少なくとも **AWS 上のアプリ・データ保存 + Azure OpenAI 系利用 + SSL 通信**で構成されていると整理できます。顧客向け API/SDK は公開資料では未指定です。 ²⁰

モデル種類については、公開資料が最も具体的です。FAQ では、AIアシスタントへの指示文と、アップロードされた特許文書の一部または全部が、**Microsoft・OpenAI・AWS・Anthropic** の外部サービスへ送信されることがあると説明しています。リリースノートでは、2024年5月の拒絶対応支援ワークフローで **Claude 3 Opus** を採用し、2025年3月には **Claude 3.7 Sonnet** に更新したことが示されています。よって、Summaria は少なくとも **Azure OpenAI 系と AWS/Anthropic 系を併用するマルチLLM構成**です。機能ごとのモデル割当の完全一覧は公開資料では未指定です。 ²¹

推論フローは、**ユーザーが特許文書をアップロードまたは質問入力 → 文書と指示が AWS 上に保存 → 必要に応じて Microsoft/OpenAI/AWS/Anthropic の外部AIへ文書の一部または全部を送信 → 応答を Summaria 画面へ返却 → コメント、共有、出力、分類、拒絶理由対応へ展開**という理解になります。FAQ では、指示を行ったユーザーを特定できる情報（ユーザID、メールアドレス等）は外部サービスへ提供されないとされています。また、FAQ と規約検索結果では、外部 AI ベンダー側の条件上、学習データ等として蓄積・利用しない、再学習には利用されない旨が示されています。 ²²

暗号化と保存に関して、**通信暗号化は SSL と明記**されています。一方で、アプリケーションデータベースの保存時暗号化アルゴリズムや鍵管理方式は、公開資料からは読み取れません。そのため、**転送時暗号化は明示、保存時暗号化の詳細は未指定**と評価するのが正確です。上流側では Azure OpenAI が保存時暗号化と学習不使用を明示しており、Anthropic API と Amazon Bedrock も商用利用時の非学習利用を示していますが、**Summaria 契約で実際にどの経路が使われるか、どの機能でどのプロバイダが使われるかは、別途ベンダー確認**が必要です。 ²³

公開情報から再構成した概念データフローは次のとおりです。 ²⁴

flowchart LR

```
U[利用者ブラウザ] --> S[Summaria SaaS]
IDP[IdP / SSO 任意] --> S
S --> DB[AWS上のベンダー管理DB]
S --> LLM[Microsoft / OpenAI / AWS / Anthropic]
S --> OCR[翻訳 / OCR サービス]
```

S --> OUT[Word / Excel / 共有 / コメント]
DOC[アップロード特許文書] --> S

この図は、AWS上の保存、外部AI送信先、SSO対応、共有・出力機能、翻訳/OCRサービスへの送信条件を基にした概念図であり、リージョン、保存期間、暗号鍵、機能別モデル選択ロジックは公開資料では未指定です。 25

主要なインテグレーションパターン

Summariaの公開資料で確認できる公式パターンは、**ブラウザSaaS、個別アカウント運用、SSO対応、グループ/メンバー管理、文書アップロード、コメント付与、Word/Excel出力、共有**です。特に「共有アカウントではなく個別アカウント」「SSOにも対応」という説明は、一般的な日本企業の承認審査で重要なポイントです。少なくとも、**個人アカウント乱立や共用ID利用を避ける設計**を採用しやすいことを意味します。社内DBへの直接接続や顧客向けAPI、プロキシ必須構成の公式記載は未指定です。 26

セキュリティ・コンプライアンス評価

Summariaは、今回比較した三製品の中で、**公開資料のセキュリティ説明が最も整っている**と評価できます。理由は、ベンダー全社の情報セキュリティ方針、ISMS認証（ISO27001）、セキュリティFAQ、AWS保存、SSL通信、外部送信先一覧、SSO対応、ユーザ識別情報の非送信、学習データ不利用の考え方が、公式資料でそれぞれ確認できるためです。少なくとも「何を聞くべきか」がすでに資料化されているので、稟議資料への転記がしやすいです。 27

一方で、**完全な無風ではありません**。FAQが示す通り、外部送信先はMicrosoft・OpenAI・AWS・Anthropicに及びます。したがって、外国第三者提供、委託、サブプロセッサ、リージョン固定、ログ保持、削除タイミングを、Summaria側の契約と上流ベンダー条件の両方から確認する必要があります。Anthropic API側は標準30日保持とZDRの選択肢を公開しており、Amazon Bedrockは入力・出力を基盤モデル学習に使わないと明記していますが、**Summaria契約がどの保持ポリシーに乗るかは別問題**です。ここは「基盤ベンダーの公表」と「採用SaaSの実契約」を混同しないことが重要です。 28

国内法・個人情報保護の観点では、Summariaは未出願明細書のアップロードを主要ユースケースに含みません。FAQは、外部送信先の利用規約で再学習利用されないことから、未出願文書をアップロードしてもそれ自体で新規性喪失や公知化は起きないと説明しています。ただし、これは**法的最終判断そのものではなく、サービス運用条件の説明**です。企業としては、個人情報・営業秘密・共同研究情報の投入可否を情報区分で定め、出願前の極秘案件は別承認にするなど、社内統制を残すべきです。 29

リスクと緩和策、導入時の運用要件

Summariaの主なリスクは、**外部AI送信先が複数であること、保存リージョンと保持期間の公開粒度が十分ではないこと、監査ログの公開情報が薄いこと**です。緩和策としては、契約で**利用する上流プロバイダの固定、リージョン、保持期間、ログ保全、削除証明、再委託一覧、セキュリティ質問票への回答義務**を取ることが有効です。また、**拒絶理由対応や分類付与の出力をそのまま提出物にしない**という人間レビュー統制も必要です。これはTOKKYO.AIやGenzo AIと同様、知財業務においてAIが論点抽出・叩き台作成を担い、最終判断は人が行うべきだからです。 30

運用要件としては、**SSO連携、管理者/メンバー権限、共有ポリシー、コメント・エクスポート運用、入力可能データ区分、保持期間、定期棚卸し、問い合わせルート**を定義すべきです。コスト見積りでは、プラン料金に加え、**指示追加購入、利用者数、年間/毎月契約差、トレーニング工数**を含める必要があります。公開パンフレットでは、ミニマム8,000円/月（年契約）または10,000円/月（月契約）、ビジネス15,000円/月または18,000円/月、コーポレート25,000円/月または30,000円/月、追加指示は400回/10,000円、1,000回/

18,000円、2,000回/30,000円です。契約条項では、**ログ保持、削除方式、エクスポート権、終了時のデータ返還、SLA、サポート窓口、モデル変更通知**が重要ポイントです。 ³¹

Genzo AI の評価

サービス概要とベンダー

Genzo AI は、株式会社島津製作所 ³² と株式会社IP Agent ³³ が共同で設立した新会社が提供する、知財業務自動化SaaSです。島津製作所の知的財産部が社内で開発・運用してきたプラットフォームを社外向けに展開するもので、発明提案書作成、翻訳、中間処理、先行文献調査、FTO、契約書レビューなどのモジュールを持ちます。価格は年額 100 万円～ 1,500 万円（税抜）で、利用モジュール・導入規模・組織状況で個別見積り、ユーザー数は無制限です。2026年4月時点では、当初 4 月中旬予定だった提供開始が、インフラ増強のため 5 月上旬に変更されています。 ³⁴

技術的仕組み

Genzo AI の技術説明は公開資料の範囲でも比較的明快です。公式のデータ保護ページは、**バックエンドに OpenAI API と Google Gemini API を使用**すると明示しています。さらに、顧客データは**すべて国内の AWS サーバー上で管理**し、プロジェクトデータ・処理結果・設定情報は AWS 国内リージョンに保存され、OpenAI や Google のサーバーには残らないと説明しています。オンプレミス提供、顧客向け API/SDK、SSO の公式記載は、調査時点の公開資料では未指定です。 ³⁵

学習データへの利用可否については、Genzo AI はかなり強い表現を採っています。OpenAI と Gemini の両ベンダーとの契約で、**入力情報をモデル学習やいかなる二次利用にも使わないことを義務付けている**とし、ただし不正利用防止目的で送信データが最大 30 日間保持される場合があると説明しています。これは、OpenAI の API データは原則として学習に使われず、保持期間設定や地域選択が可能であること、Google の Paid Services ではプロンプトやレスポンスを製品改善に使わないことと整合的です。ただし、**Genzo AI が実際に OpenAI ・ Google のどの契約 ・ どの地域設定 ・ どの保持設定を採用しているか**までは、公開資料だけでは見えません。 ³⁶

推論フローは、**ユーザーが文書をアップロード → 国内 AWS 上に保存 → モジュールごとに OpenAI API または Gemini API を呼び出す → 結果を AWS 上に保持 → 人間がレビューし採否を判断**という、いわゆる Human-in-the-Loop 設計です。ホームページでは Human-in-the-Loop を前面に出し、実務のプロフェッショナルが AI 提案を確認・修正する前提としています。また、FTO モジュールについては、開発資料をドロップして国を選ぶと、**連携外部DB**で検索から一次スクリーニングまで実行すると明示されています。したがって、FTO に限っては外部の特許DBないし検索DBとの接続が製品設計に含まれます。 ³⁷

アクセス制御の説明は、三製品の中で最も強いです。Genzo AI は、**運営担当者であっても顧客データにアクセスできない設計**を採用し、AWS のアクセス権限設計により、社内運営担当者は顧客データへのアクセス権を持たず、個人情報が入力された場合でも運営側から参照できないとしています。また、顧客は保存データを自らの操作で完全削除でき、削除後は復元不能とされています。監視の面では、OpenAI ・ Google のサービス状況を継続的に監視し、異常検知時は速やかに顧客へ報告するとしています。ツール固有の暗号化アルゴリズムや鍵管理方式は、公開資料では未指定です。 ³⁸

公開情報から再構成した概念データフローは次のとおりです。 ³⁹

flowchart LR

U[利用者ブラウザ] --> G[Genzo AI SaaS]

G --> AWSJ[AWSJ[国内AWS保存領域]]

```
G --> OAI[OpenAI API]
G --> GEM[Google Gemini API]
G --> EXT[FTO用 連携外部DB]
G --> H[Human-in-the-Loop レビュー]
AWSJ --> DEL[ユーザー主導の完全削除]
```

この図は、国内AWS保存、OpenAI API・Gemini APIの利用、FTOの外部DB連携、人間レビュー前提、顧客主導削除という公開説明に基づく概念図であり、内部マイクロサービス、ネットワーク分離、暗号鍵管理、SSO/SCIMの実装有無は公開資料では未指定です。 ³⁹

主要なインテグレーションパターン

Genzo AIの公式パターンは、**ブラウザSaaS + 国内AWS保存 + バックエンドLLM + モジュール別処理 + FTOの外部DB連携**です。ユニークなのは、**ユーザー数無制限とカスタムプロンプト共有**を製品上の強みとして出している点で、これは全社展開を前提にしやすい一方、社内統制が弱いとプロンプト資産の乱立にもつながります。SSO、SCIM、社内DB直接連携、プロキシ経由の正式サポートは公開資料上は未指定です。 ⁴⁰

セキュリティ・コンプライアンス評価

Genzo AIの公開アーキテクチャは、**国内AWS保存、上流AIへの学習利用禁止、運営者アクセス不可、ユーザー主導削除**という点で、非常に承認向きのメッセージです。特に日本企業では「運営者が見られない」「国内サーバー」「削除できる」が稟議の通りやすさを大きく左右します。また、基盤として使うOpenAI ⁴¹はAPI/ビジネス製品におけるSOC 2 Type 2、ISO/IEC 27001/27017/27018/27701を公表しており、Paid Servicesにおける再学習不使用や地域対応も示しています。Google ⁴²もGemini API Paid Servicesにおける非学習利用を公表しています。 ⁴³

しかし、社内承認で実際に効くのは**ツール自体の証跡**です。その点でGenzo AIは、調査時点では**プライバシーポリシー、利用規約、DPA、ISO/SOC、SLA数値、監査ログ仕様、リージョン詳細、バックアップ/DR条件**の公開が十分ではありません。さらに、サービス開始時期がインフラ増強のため後ろ倒しになっていることから、**成熟度・運用安定性・対応体制の検証**はこれからです。つまり、**設計思想は強いが、公開コンプライアンス証跡はまだ薄い**というのが最も正確な評価です。 ⁴⁴

国内法の観点では、Genzo AIも個人情報・技術情報・契約書を扱う可能性があります。国内保存を強く打ち出しているためAPPI対応の説明はしやすいですが、OpenAI APIとGemini APIの利用がある以上、**処理委託・外国第三者提供・サブプロセッサ・保持期間・削除条件**の法務整理は依然必要です。また、FTOは対外データベース参照を含むため、検索対象DBのライセンスや利用規約、出力の再利用可否も契約確認項目です。 ⁴⁵

リスクと緩和策、導入時の運用要件

最大のリスクは、**新サービスであることに起因する運用成熟度の不足**です。モジュールは段階提供で、2026年春時点ではまず3モジュール先行、他機能は夏以降の展開予定です。このため、本格導入でなく**限定PoC → セキュリティ質問票 → 契約交渉 → 本番移行**の順にすべきです。PoCでは、個人情報・共同研究先機密・未公表M&A情報の投入を避け、ダミーまたは低機密の既公開データで評価するのが妥当です。 ⁴⁶

緩和策としては、**契約書一式の入手が最優先**です。具体的には、MSA、DPA、プライバシーポリシー、サブプロセッサ一覧、保持期間表、削除証明、インシデントハンドリング、監査ログ提供、バックアップ/復旧、リージョン、暗号化、ペネトレーションテスト有無、サポート窓口、SLAを求めるべきです。運用要件では、ユーザー数無制限のメリットをそのまま使うのではなく、**部門単位の利用範囲、管理者権限、カスタムプロンプト承認、出力レビュー責任、モデル切替・機能追加の変更管理**を定める必要があります。コストは、契

約額そのものよりも、導入支援・定着支援・既存業務フロー再設計・PoC工数が大きくぶれやすいタイプです。 47

横断比較と推奨

以下の表は、社内承認資料にそのまま転記しやすいよう、機能・データ取扱い・認証公開・コスト要因・推奨度を一枚にまとめたものです。

ツール	主用途	データ取扱いの要点	セキュリティ認証の公開	コスト要因	推奨度	根拠
TOKKYO.AI	特許検索、AIドラフティング、関連特許分析	専用環境、検索履歴の専用環境内保持、監査ログあり。プロンプト情報は Azure OpenAI Service または OpenAI API に送信可能。保存リージョン・暗号化詳細は未指定。	プライバシーポリシー、情報セキュリティポリシーは公開。ISO/SOC/SLA は公開資料では未指定。	初期0円、1ID月額20,000円、ID数と値引き条件が主因。	条件付き推奨。検索・ドラフト一体運用は魅力だが、契約で外部送信とデータ所在を詰める前提。	48
Summaria	特許文書読解、拒絶理由対応、分類・比較	AWS 上のベンダーDB保存、SSL 通信、外部送信先は Microsoft/OpenAI/AWS/Anthropic。ユーザ識別情報は外部送信しない。SSO 対応。	ベンダーの ISMS 認証 (ISO27001) 公開あり。情報セキュリティ方針も公開。SOC、SLA は公開資料では未指定。	プラン料金に加え、追加指示購入、契約形態、利用者数、運用定着コスト。	最優先推奨。公開資料の透明性が高く、日本企業の稟議に最も乗せやすい。	49

ツール	主用途	データ取扱いの要点	セキュリティ認証の公開	コスト要因	推奨度	根拠
Genzo AI	知財業務全体の自動化、FTO、契約レビューまで含む広範業務	国内 AWS 保存、運営者アクセス不可、顧客主導削除、OpenAI API / Gemini API 使用、入力は学習・二次利用禁止、必要時最大30日保持。	公開された認証・SLA・DPA は不足。アーキテクチャ説明は強いが、ツール固有の証跡はまだ薄い。	年額 100 万～1,500 万円、モジュール構成、導入規模、定着支援、PoC 工数。	PoC推奨。 将来性は高いが、本番承認は契約・コンプライアンス資料取得後が妥当。	50

総合判断として、承認の通しやすさで並べると **Summaria > TOKKYO.AI > Genzo AI**、機能の広がりでは **Genzo AI > TOKKYO.AI > Summaria**、公開コンプライアンス資料の充実度では **Summaria > TOKKYO.AI > Genzo AI** です。したがって、知財部門がまず安全に生成AIを実務導入するなら Summaria、ドラフティングと検索を同時に改善したいなら TOKKYO.AI、将来的に知財業務全体の再設計まで狙うなら Genzo AI を段階導入する構成が合理的です。 51

社内承認資料の添付文書としては、TOKKYO.AI には **DPA・リージョン・OpenAI直API利用範囲・監査ログ出力・終了時データ返還条件**、Summaria には **上流AIベンダーごとの保持期間とリージョン・ログ保持・削除条件・SLA**、Genzo AI には **利用規約・プライバシーポリシー・DPA・サブプロセッサ一覧・認証証跡・バックアップ/DR・監査ログ仕様** の追加取得を求めるべきです。ここまで揃うと、情報システム、法務、知財、購買の横断承認が格段に進めやすくなります。 52

社内説明用スライド案

スライド案

スライド名：導入検討の目的

- ・知財業務の読解・検索・ドラフティング・FTO を効率化する
- ・ただし、機密・個人情報・未出願情報の保護を最優先にする
- ・承認判断は「便利か」ではなく「説明可能で統制可能か」で行う

口頭説明文：

今回の比較は、単なる機能比較ではありません。日本企業として本当に導入できるか、つまりデータ保護、法務、監査、運用まで含めて説明できるかを見ています。 2

スライド名：対象製品の全体像

- ・TOKKYO.AI は検索とドラフティングの一体運用が強み
- ・Summaria は特許文書読解と拒絶理由対応に強み
- ・Genzo AI は知財業務全体の自動化を狙う広範囲型

口頭説明文：

三製品は競合でありつつ、適する用途が少しずつ違います。とくに Summaria は読解支援、TOKKYO.AI は検索と起案、Genzo AI は業務全体自動化という色分けが可能です。 53

スライド名：承認判断の評価軸

- ・データはどこに保存されるか
- ・外部AIへ何が送られるか
- ・学習利用されるか、ログは残るか
- ・契約終了時に返還・削除・移行できるか

口頭説明文：

生成AIの承認では、保存、送信、再学習、監査、終了時処理の五点を外すと後で必ず問題になります。今回の比較もこの順に行っています。 54

スライド名：TOKKYO.AI の要点

- ・専用環境、監査ログ、検索履歴共有が強み
- ・GPT-4o、Gemma 等を機能別に利用
- ・Azure OpenAI Service または OpenAI API への送信条件が規約に明記
- ・認証・リージョン・暗号化詳細は公開資料では不足

口頭説明文：

TOKKYO.AI は知財検索と生成をつなぐ実務性が高い一方、上流AI送信条件を契約で具体化しないと承認上の懸念が残ります。本番導入前の追加確認が前提です。 9

スライド名：Summaria の要点

- ・AWS 保存、SSL 通信、SSO 対応を明示
- ・外部送信先が Microsoft/OpenAI/AWS/Anthropic と公開されている
- ・ユーザ識別情報は外部送信しない
- ・ベンダーは ISMS 認証 (ISO27001) を取得済み

口頭説明文：

Summaria の良さは、機能だけでなく、セキュリティ説明が公開資料として揃っている点です。稟議に転記しやすく、質問票も組み立てやすい製品です。 55

スライド名：Genzo AI の要点

- ・国内AWS保存、運営者アクセス不可、ユーザー主導削除を明示
- ・OpenAI API と Gemini API をバックエンド利用
- ・Human-in-the-Loop を前提にしている
- ・ただし公開契約・認証証跡はまだ不足

口頭説明文：

Genzo AI は設計思想が非常に良く、将来性があります。ただし新サービスであり、公開文書がまだ薄いため、現時点では本番導入より PoC 承認の方が適切です。 44

スライド名：セキュリティとコンプライアンスの比較

- ・TOKKYO.AI は専用環境と監査ログが強い

- Summaria は公開証跡が最も揃っている
- Genzo AI は国内保存とアクセス不可設計が強い
- 三製品とも、外国移転・委託・上流AI契約の確認は必要

口頭説明文：

勝ち筋はそれぞれ異なります。承認のしやすさを見るなら Summaria、アーキテクチャの魅力では Genzo AI、知財検索の実務導線なら TOKKYO.AI という整理です。 56

スライド名：運用設計の前提

- 管理者権限を限定し、共用IDを禁止する
- 高機密・個人情報・共同研究情報の投入基準を決める
- 出力は必ず人間レビューを通す
- ログ保持、棚卸し、削除、エクスポートを定例化する

口頭説明文：

ツールの良し悪しより重要なのは、社内の使い方です。とくに知財業務では、AI出力をそのまま外部提出しないという統制を必須にすべきです。 57

スライド名：費用と契約で見るべき点

- TOKKYO.AI は ID 課金型
- Summaria はプラン課金 + 指示追加購入あり
- Genzo AI は年額個別見積り型
- どの製品でも、削除条項・終了時返還・SLA・再学習禁止が核心

口頭説明文：

価格そのものより、何に応じて費用が増えるかを見極めることが大切です。そして契約では、終了時のデータ返還と削除証明まで確保しておく必要があります。 58

スライド名：推奨方針

- まず本命は Summaria
- TOKKYO.AI は条件付きで並行評価
- Genzo AI は限定 PoC で検証
- 稟議添付はアーキテクチャ、契約、ログ、削除、費用の五点セットで出す

口頭説明文：

現実的な進め方は、Summaria を本命、TOKKYO.AI を条件付きの比較候補、Genzo AI を PoC 枠として扱うことです。これが、スピードと統制の両立に最も適した順番です。 59

スライド構成全体の意図

この 10 枚構成は、機能説明から入らず、承認基準 → 各製品の説明 → セキュリティ比較 → 運用条件 → 推奨方針の順に並べています。日本企業の稟議では、現場は機能、情報システムはデータフロー、法務は契約、役員は費用対効果を見るため、順序を誤ると議論が噛み合いません。今回の構成は、そのズレを最小化するためのものです。 4

1 51 59 <https://patent-i.com/ja/news/87/>

<https://patent-i.com/ja/news/87/>

2 15 54 https://www.ppc.go.jp/news/careful_information/230602_AI_utilize_alert
https://www.ppc.go.jp/news/careful_information/230602_AI_utilize_alert

3 <https://laws.e-gov.go.jp/law/415AC0000000057>
<https://laws.e-gov.go.jp/law/415AC0000000057>

4 52 57 https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/ai_shakai_jisso/20260331_report.html
https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/ai_shakai_jisso/20260331_report.html

5 7 9 17 33 48 56 58 <https://www.tokkyo.ai/pvt/price/>
<https://www.tokkyo.ai/pvt/price/>

6 <https://www.tokkyo.ai/company/>
<https://www.tokkyo.ai/company/>

8 12 42 <https://www.tokkyo.ai/pvt/function/>
<https://www.tokkyo.ai/pvt/function/>

10 41 <https://learn.microsoft.com/en-us/azure/foundry/responsible-ai/openai/data-privacy>
<https://learn.microsoft.com/en-us/azure/foundry/responsible-ai/openai/data-privacy>

11 13 53 <https://www.tokkyo.ai/pvt/>
<https://www.tokkyo.ai/pvt/>

14 <https://www.legaltech.co.jp/information-security-policy/>
<https://www.legaltech.co.jp/information-security-policy/>

16 <https://www.tokkyo.ai/terms/>
<https://www.tokkyo.ai/terms/>

18 28 45 https://www.ppc.go.jp/personalinfo/legal/guidelines_offshore
https://www.ppc.go.jp/personalinfo/legal/guidelines_offshore

19 49 <https://patent-i.com/ja/vision/>
<https://patent-i.com/ja/vision/>

20 23 24 31 <https://patent-i.com/summaria/brochure.pdf>
<https://patent-i.com/summaria/brochure.pdf>

21 22 25 29 32 55 <https://patent-i.com/summaria/manual/faq>
<https://patent-i.com/summaria/manual/faq>

26 https://patent-i.com/summaria/manual/group_and_dept
https://patent-i.com/summaria/manual/group_and_dept

27 https://patent-i.com/ja/security_policy/
https://patent-i.com/ja/security_policy/

30 https://patent-i.com/summaria/manual/R_20240527
https://patent-i.com/summaria/manual/R_20240527

34 <https://www.shimadzu.co.jp/news/2026/acmnk57uqb3579ay.html>
<https://www.shimadzu.co.jp/news/2026/acmnk57uqb3579ay.html>

35 36 38 43 <https://www.genzo-ai.co.jp/security.html>
<https://www.genzo-ai.co.jp/security.html>

37 39 40 44 46 47 50 <https://www.genzo-ai.co.jp/>
<https://www.genzo-ai.co.jp/>